

児童のアセスメントを通じた

特別支援教育コーディネーターの取組

本校では、特殊教育から特別支援教育への転換に向け、本年度より従来の特別支援教育委員会に加え、より実働的な特別支援教育連絡会を新たに設置し、情報交換の場を設けた。配慮が必要な児童に対しては、放課後や夏休みを利用し、コーディネーターと学級担任を中心に、ケース会議を行い、実態の把握や指導の手立て等を検討し、随時経過をおっている。場合によっては、保護者の了解をとり、発達検査（WISC-Ⅲ、心の理解課題等）を行い、特性の理解に役立てている。

また、二学期制に伴い、配慮を要する児童についての研修会も年2回から3回と増やし、指導の経過をより詳細に分析できるようにした。さらに、パニックや暴力等、問題行動に関しては、問題行動分析シートを用意し、いつ、どのような状況で発生するのか、その背景を分析することで、適切な支援活動の推進を図っている。

1 年間計画と特別支援教育コーディネーターの役割

(1) 特別支援教育に係わる年間計画

- ① 特別支援教育委員会（年3回）
- ② 特別支援教育連絡会（月1回）
- ③ ケース会議（随時）
- ④ 校内研修会（年5回）
 - ・ 第1回 配慮を要する児童のアセスメントと支援の在り方について（5月）
 - ・ 第2回 ADHDの児童に対する支援・個別の指導計画の作成（8月）
 - ・ 第3回 配慮を要する児童の中間報告（10月）
 - ・ 第4回 事例研修（12月）
 - ・ 第5回 配慮を要する児童に対する指導の成果と課題について（3月）
- ⑤ 保幼小連絡会（1月）・小中連絡会（2月）・就学相談、見学（随時）
- ⑥ 巡回相談（11月）・発達相談、発達検査（随時）

(2) 特別支援教育コーディネーターの役割

- ① 特別支援教育委員会の中心となり、校内の連絡調整や校内研修会の企画、運営等、年間計画の策定を行い、校内支援体制の整備と調整を行いながら、啓発に努める。
- ② 保護者や他の教育機関、医療機関、福祉機関との連携や調整を行う。
- ③ 支援内容を検討するチーム（特別支援教育連絡会等）の推進役となり、学級担任と連携を図りながら、支援方針を決め、具体的な指導や対応について検討していく。
- ④ 保幼小連絡会、小中連絡会等、円滑な移行連携システムの構築を図り運営を行う。
- ⑤ 特別支援教育コーディネーター研修会等の研修内容について、伝達講習を行う。
- ⑥ 個別プロフィールや個人シート等を作成し、実態把握に努め、情報の管理を行う。
- ⑦ 教育相談を行い、必要に応じて行動観察や心理検査等を実施し、特性を分析する。

3 5年生のA児への取組

(1) 支援の経緯

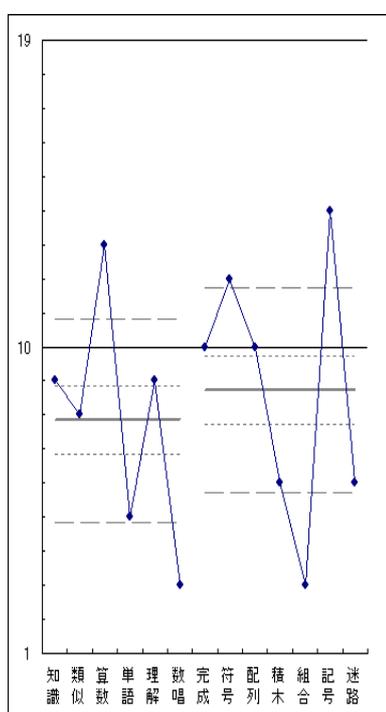
7月初旬、低学年の学級担任から、学習障害（LD）の疑いのある児童に対する相談があった。

保護者とも相談し、発達特性を把握するため、発達検査（WISC-III）を夏休みに実施した。関係機関と連携をとりながら結果の分析を行い、支援方針と具体的な支援策をまとめ、後日、保護者と学級担任、特別支援教育コーディネーターの三者で懇談会を開催した。

(2) A児の実態

明るく快活で、真面目である。漢字習得に困難を示し、一生懸命に課題に取り組むが、定着が難しい。今後、自己肯定感の低下や無気力等、二次障害が懸念される。

(3) WISC-IIIの結果



言語性 IQ92、動作性 IQ87、全検査 IQ89 で知的な遅れはなかった。群指数は、言語理解 IQ86、知覚統合 IQ82、注意記憶 IQ88、処理速度 IQ117。下位検査では、算数（13）、符号（12）、記号探し（14）、絵画完成（10）、絵画配列（10）が高く、単語（5）、数唱（3）、積木模様（6）、組合せ（3）、迷路（6）が低かった。

これらの結果の分析から、つまずきの主な原因として、課題解決のための方略が立てにくいことが分かった。符号（12）、記号探し（14）の得点が高いことから、枠組みを作ってもらおうとできるという認知の特性があり、数唱（3）の得点が低いのは、単に記憶できないという問題ではなく、どう覚えていったらよいか覚え方の筋道を自分なりにみつけて、覚えていくといった作動記憶（ワーキングメモリー）の弱さがうかがえる。また、積木模様（6）、組合せ（3）といった視覚構成（部分と全体の関係）や空間操作が苦手で、

特に組合せ（3）の得点が低いことから、モデルがないと一人で考えることは、さらに難しい課題となることが分かった。このように、部分と全体の統合や空間情報処理の弱さが、漢字学習など文字習得に困難をもたらしている一因として考えられた。

(4) A児への支援方針

- ① 自分で考えさせないようにする。
- ② 方略のパターンを示し、繰り返し学習させる。
- ③ 大きいマス目の漢字練習帳を利用するなどして、書くことへの抵抗感を軽減する。正しく書けなくてもいいから読めることを完璧にすることを目標にする。意味が分かる、読めることで、自信をつけさせ、漢字練習の数を減らしていくことで、負担を減らし、部首カード等、視覚的な教材を利用して、操作活動を中心に学習を進めていく。

(5) 具体的な支援とその効果

漢字の書き方を理解させるため、ルールが分かれば、順番には強いという特性を

生かし、新出漢字の学習の際（一斉授業）、黒板で筆順の色分け（五色）を行った。漢字の形や構成をとらえる上で効果があり、周りの児童の理解も促す結果となった。

(6) その他の支援策

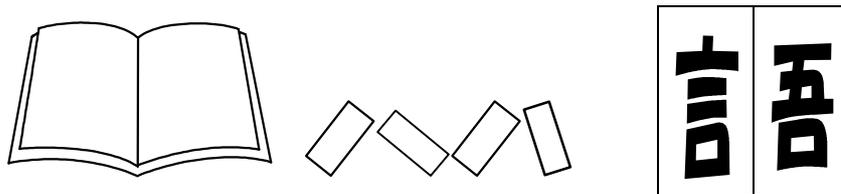
- ① 内的思考を高めさせるため、課題の解決方法についての理解を図る（声にならないことばで、考えさせる。）。

例1 **迷路** 目でたどる。→ 指でたどる。→ 鉛筆で書く。

例2 **数唱** カードを見せる。→ カードをかくす。→ 頭の中で書かせる。

- ② 漢字の意味を理解させるため、漢字や部首の意味を教え、熟語で増やしていく。

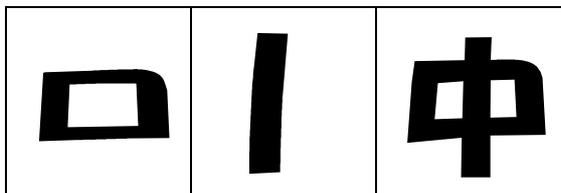
例1 **組合せノート** ノートの漢字を見せる。→ 部首を選び、組み合わせる。



例2 **熟語集め「~のつく言葉」** 「休」（人が木で休む）→ 夏休み、休日等

- ③ 形をとらえることが、難しいので、漢字の構成を理解させる。

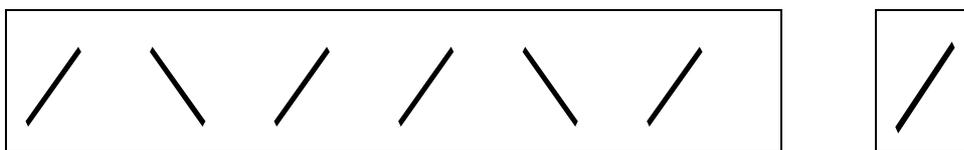
例1 **透明シート** 複数の透明シートを重ね、漢字を構成させる。



例2 **埋め込み漢字** 一部をあけて提示する。→ ヒントを出す。（同時、継次）

※ 部分品の漢字を意識させる。書く場所（位置）の意識化を図る。

例3 **斜め線** 同じもの探し → 透明シートで照合して遊ぶ。



例4 **漢字組み立て** 書く順番に色分けしたブロックを提示。→ 組み立てる。

- ④ ルールが分かれば、順番には強いので、漢字の書き方を理解させる。

例1 **わかるわかるテスト** 部首ごとに色分けをする（中抜き文字）。→ 色分けした順番に従い、区別してある中に部首を書き込んでいく。

例2 **筆順色分け** 色の順番に、漢字を書いていく。

- ⑤ 興味関心の高いものを利用し、漢字に興味を持たせる。

例1 **漢字九九**（学習研究社）

- ⑥ 形を思い出すのが難しいので、再認識できる一覧表等を用意し、定着を図る。

例1 **おたすけカード** ラミネートする。→ 身近なところに保管、掲示する。

☆ 書くことよりも、遊ぶことを中心に、学習を進める（家庭と連携）。